星槎大学紀要（Seisa Univ. Res. Bul.）共生科学研究 No.18　33～36（2022）

特集　宮澤名誉会長と星槎と私

15 年後の星槎を創る

蓮　田　亮　大

三月にご逝去された宮澤保夫名誉会長。傍らでお仕事の機会をいただく中で、たくさんの言葉を聞くことができた。ある時、星槎に長く務める先輩に言われた。「宮澤会長の言葉のシャワーを浴び続けなさい。もし、今、分からなくても、いずれその言葉が繋がってくるから。とにかく浴び続けることだよ」。

「あなたはなぜここにいるのかを考えていますか？」

宮澤保夫名誉会長と初めてお会いしたのは 20 年前の二宮のみかん校舎。

当時の最終面接といえば恒例でみかん校舎に 50 名近くの新任職員が集まる中で、冒頭に保夫会長に熱い挨拶を頂いた後、お酒を交えつつ先輩達から星槎について聞きながら挑戦してみたいことを話し合うなど、和やかな雰囲気で会が進行していた。会も終盤、ふと見上げると保夫会長が私に対して「あなたは、なぜここにいるのかを考えていますか？　この状況がわかっていますか？」とだけ言い残し、会場を出ていってしまった。

私は何が何だか分からずにキョトンとしていると、先輩方から、「保夫会長が何を言いたかったか分かるかい？」と尋ねられたものの、全くわからないままその日を終えてしまった。周囲にいた同期の新任者は「きっとあいつはここで星槎を去るだろう」と思っていたに違いない。しかしながら既に非常勤として勤務していた私は、星槎の子どもたちが生き生きとした表情に変わる瞬間を目の当たりにしてワクワクしていたので、その日のことは大きくは受け止めず、図太く、日常の子どもたちの関わりに没頭していった。

しばらく後、星槎中学校が開校し、翌年続けて星槎高等学校が開校した。そこでの勤務が続いた頃、保夫会長に呼ばれ、「大磯キャンパスに中学校を作るから、お前がやるんだからな！」と、突如、教室の立ち上げの仕事がスタートした。新教室の設置準備では相談する度に、とにかくたくさん叱られた。特に、時間割については、「何で、自分（大人）の都合で学校の時間割を考えるんだよ。子どもたちの視点で、子どもたちの時間をどう作るかって観点がゼロなんだよ」と何度も何度もやり直しを命じられた。

最終的に出来上がった時間割は、比較的柔軟に取り扱える教科を組み合わせて、子どもたちの興味関心に合わせて丸一日、自由自在に使える時間割となり、これがスタートラインになった。当時は、この大きなグループの会長という立場の方が、ここまで小さな教室の時間割にこだわるということに驚きであった。ただ、今になって思い返すと、このひとつの時間に、いかに子どもたちのことを思い浮かべて作りこむことこそが、星槎の環境づくりの出発点であることが分かる。ひとつの時間、授業が複数重なり、一週間になり、その積み重ねが一年になり、学校になる。授業を創るという一滴の積み重ねが、生徒の未来を創ることに繋

星槎グループ、国際学園

がる。保夫会長が時間割にこだわったことが今になって沁みてくる。

「本質を求めて、星槎をも越える」

2015年4月、「アフリカデイやるぞ！」と保夫会長が突如、校舎に乗り込んできた。またもキョトンとする教職員をしり目に、将来のアフリカと日本の関係性、多様性を知ることの大切さ、主体的に知ることこそが繋がりを生むことを、情熱的に話された。この同じ年に国連でSDGsが採択されるが、ほとんど浸透していなかった頃である。

正式名称が「SEISA Africa Asia Bridge」と命名されたこの途方もないイベントも間違っていなければやってみろの精神で乗り切った。初年度はまさに“乗り切った”が相応しかった。当初はキョトンとした教職員の中には、反対するものもいたと思う。ただ、回数を重ねるごとに、なぜこのイベントをやるのか、なぜこのイベントが必要なのか、子どもたちの方が先に反応し始めた。それぞれの違いを豊かさと捉えることから始めたこのイベントは、子どもたちにとってより身近なものになり、さらに自分事になり、主体性を育んだ。

「もっともっと自分から知ろうとしないと繋がらないんだよ。文化祭とは違うんだからな」という保夫会長の助言により、さらに学びのサイクルが加速する中で、課題に対して真剣に向き合って表現する先輩の姿がカッコイイという文化ができはじめていることは嬉しい限りである。また、子どもたちが発することによる訴求力は、大人のそれとは比べものにならず、その成果は、ユネスコのESD賞の日本代表に選出されたことにも表れている。

「このイベントもそうなんだけど、絶対『星槎』だけでくくるなよ。本質を捉えるためには、星槎だけではダメなんだ。まして、できたことを誰かがひとり占めしていてもダメ。どれだけ多くの人と共感できるかなんだ。」

また、保夫会長を囲んで、星槎満足度調査という調査研究部門があった。ここでは特に不登校特例制度の星槎中学校、星槎名古屋中学校、星槎もみじ中学校、そして星槎高等学校の子どもたちや保護者、教員の様子を観察し、本当の意味で子どもたちが笑顔になっているのか、これまでやってきた星槎の取り組みは、本当に子どもたちにとって効果があるのかそれらを検証しようとするものであった。

この時、保夫会長と強く共感する場面があった。私が「星槎で長く働くと、当然子どもたちにとって最良の環境を作ろうとするわけで、卒業式なんかでは、本当にありがとうと言われることが多くて、ついついその気になってしまうんですよね。でも、本当にそうなのかなって。本当に最良なのかなって。星槎にいると、そのことが逆にマヒしてしまうんですよ」と言ったところ、保夫会長が深く思いめぐらせて、「そういうことなんだよな」とおっしゃった。子どもたちにとって、たくさんの貴重で大切な場所を、正に全身全霊で創ってきた保夫会長が、この段においても、心底そのように思われていることに、感動したのを覚えている。

これまでも子どもたちのための教育環境を作り、多くの子どもたちを笑顔にし、多くの保護者を、家庭を笑顔にしてきたはずである。それでもなお、本質を探し求めるのはなぜか。それは知っているからである。時間が、時代が変われば、これまでやってきた取り組みは最高のものではなくなるということを。間違ってなければやってみるの精神で、前進し続けてきた。ただ、正解や確信ではなかったのかもしれない。だから、教育の本質とは何か、本質

を探し求めつづけるのだろう。
「あたかも自分が大そうなもの、最高のものを提供してるように思ってしまう。ただ違うんだ。常に自分自身の取り組みや自分自身に、懐疑的でなければいけない。そうしないとそこには成長はないんだ、発展はないんだ、進歩がないんだ」
調査研究の時間は、今まで他の誰からも感じたことのない、保夫会長の子どもたちに対するマグマのような愛情を感じることのできる心地よい時間であった。

保夫少年がワクワクする学校をイメージする

保夫会長が、最後の仕事として位置づけられた学校づくりに参画することが指示されたのは、今から4年ほど前であった。学校のイメージは、20年以上前の星槎国際高等学校の設置趣意書にすでに描かれていたものである。本来の学びとは、子どもたちの純粋な「なぜ」や「何」等、身近な疑問から発芽し、周囲の動機づけにより、興味関心が一層増幅するものである。誰にでも、小さな頃に、来る日も来る日も日が暮れるまで、ひとつのことに没頭し続けた経験はないだろうか。
しかし、学校では、学年や教科、単元など、言わば大人の都合で、子どもたちの興味関心の対象の続きが見られなくなってしまう、分断されてしまうのが実情である。また、とても得意で、意欲的に取り組めるものがあるにもかかわらず、苦手なものに引きずられて、押し並べて平均的に到達することでしか、選択肢が得られない環境が横たわりつづけている。
登校拒否、学習障がい、不登校、発達障がい、行き場のない子どもたちのための「居場所づくり」がなかなか認められない端っこの教育環境であった当時と比べて、今や、こうした星槎の教育の在り方が、新しい学びの選択肢として、国の推奨する先端に位置付けられるものになってきていることを実感する。
ところが、この仕事について保夫会長に相談に伺うとき、そんな国の動向などはさて置き、ワクワクと目を輝かせた子どもの姿を思い浮かべながら、いつもそのための授業の話が大半であった。
「それこそ、教科ごとに飛び級ができるような、もっともっと子どもたちの能力が、個別最適に生かされる環境があってもいいのではないか」「もっともっと教科を大きく跨ってしまうような、そんな横断的な授業が自由自在にできたらどうだろう」「学校のエントランスが博物館になっていて、実物大の恐竜の骨があったり、それが動き出すのもいいなぁ」「宇宙の視座で、地球を見返したり、自分の命を考えたり、そんな授業が必要なんだ」「この壁を打ち破ることができれば、子どもたちはもっともっと楽しくなる」「子どもたちのそれぞれ異なる特徴が豊かさなんだと認められる」「もしかしたら、世の中の常識を覆すくらいの才能が開花するかもしれない」「そのための種をたくさんたくさん捲いているんだよ」「お前も15年後（時には20年後とも）を考えながら仕事しろよ。15年後なんて、予想なんてできないから、自分で種まいて創るもんだぞ」
話を聞きながら、その眼を輝やかせた子どもは、幼き頃の保夫少年本人なのではと思うことが度々あった。保夫少年がワクワクする学校。保夫会長を知る人であれば、新しい学校の様子がイメージしやすいのではないだろうか。

20 年前のあの時、星槎を去っていたら、未来を創るということにこんなに真剣になることはなかった。自分がいかに微力なのかということを知ることもなかった。自分だけの力では何もできなくて仲間の助けを本当に必要となることを知ることもなかった。仕事においても、仲間の得意な部分を繋ぎ合わせることが重要になるということを実感することもなかった。

星槎に来て、保夫会長に出会い、星槎を学び、星槎を伝える中で、「私はなぜ、何のために星槎にいるのか」という、初めて保夫会長にお会いした時の問いの答えに近づきつつあるのを感じている。

私が保夫会長からお聞きした数々の言葉は、私個人や星槎のみでくくることは許されない。一人でも多くの人と共有することも大切な仕事の一つであろう。

掲載した写真は、数年前の SEISA Africa Asia Bridge のフィナーレで、会場に集まった多くの児童、生徒、学生、ご来賓、保護者、教職員に向けてスピーチをしている際のものである。熱い熱い学生時代を思い起こすようなシュプレヒコールにも似たスピーチ直後の一コマである。

にこやかにほほ笑む宮澤保夫名誉会長。その空間の、その瞬間を切り取ったはずの表情は、今では様々なことを連想させる。

私たちに託したものが、未来において、どのように実現されているか楽しみにしているようにも見える。未来の子どもたちの笑顔を見渡して満足しているようにも見える。15 年後でも、七転八倒しながら、依然として失敗を繰り返している私たちを「バッカだなぁ」と愉快そうに眺めているようにも見える。

15 年後を未来（星槎）を創る。保夫会長の感想を楽しみにしながら、星槎を前に進めたい。